

アメリカの大学における学習支援と 日本の大学での適用可能性

松宮 慎治・古畑 翼
(高等教育研究センター, 教学IR室)

2025.2.12. 中央図書館2Fセミナー室

報告会の目的

■アメリカの大学での調査報告

◇Supplemental Instruction(以下,「SI」)

- ▶カルフォルニア州立大学チコ校とサクラメント校のSIプログラムを視察し, スーパーバイザーとピアチューターにインタビューを行った.
- ➡その内容をもとに, 制度設計や運営についての調査を報告する.

■日本の大学での適用可能性を議論

◇日本の学習支援

- ▶アメリカとは文脈が異なる.
- ➡日本の大学におけるSIプログラムの適用可能性について議論する.

はじめに:SIとは？(Marra and Litzinger 1997)

■Learning Enhancement Programの一種

◇対象

- ▶ハイリスクの学生ではなく、ハイリスクのコース(授業)を対象とする。

◇方法

- ▶定期的に行われる授業外のセッションで支援を提供する。
- ▶トレーニングを受けたSIリーダーが重要な役割をはたす。

(e.g.,)

- a)既存の知識と新しい知識を結びつける, b)新しい知識を応用する, c)その授業に適用可能な学習戦略を検討する。

◇目的

- ①学生が授業の内容を修得しやすくする。
- ②学生がよりよい学習スキルや戦略を身につけることを奨励する。

本日のメニュー

①アメリカでの調査報告

②日本での適用可能性

③ディスカッション

本日のメニュー

①アメリカでの調査報告

②日本での適用可能性

③ディスカッション

カルフォルニア州立大学チコ校(以下,「Chico State」)での実践

■Student Learning Center(以下,「SLC」)

◇インタビュー先

- ▶スーパーバイザー(学習支援担当の教職員), ピアチューター(学生), パートナー (Supplemental InstructionやWriting Centerを利用している授業担当教員).

◇制度設計

- ▶SLCのプログラムは, 以下の3つにわけられる.
 - ①Subject Tutoring
 - ②Supplemental Instruction
 - ③Writing Center

Chico StateのSLCによる3つのプログラム

①Subject Tutoring

- ・毎週1時間, 教員が推薦するピアチューターのチュータリングを受けられるプログラム.
- ・基本的には頻繁な(できれば毎週の)利用が推奨される.

②Supplemental Instruction

- ・特定の授業をすでにマスターしているSIリーダー(学生である)によって, 週に2~3回行われる.
- ・一部をのぞいて, Requirement(行くことによる加点)は行っていない. 誰が参加して誰が参加していないといった情報は(成績を含めて), SI側からはわからない.

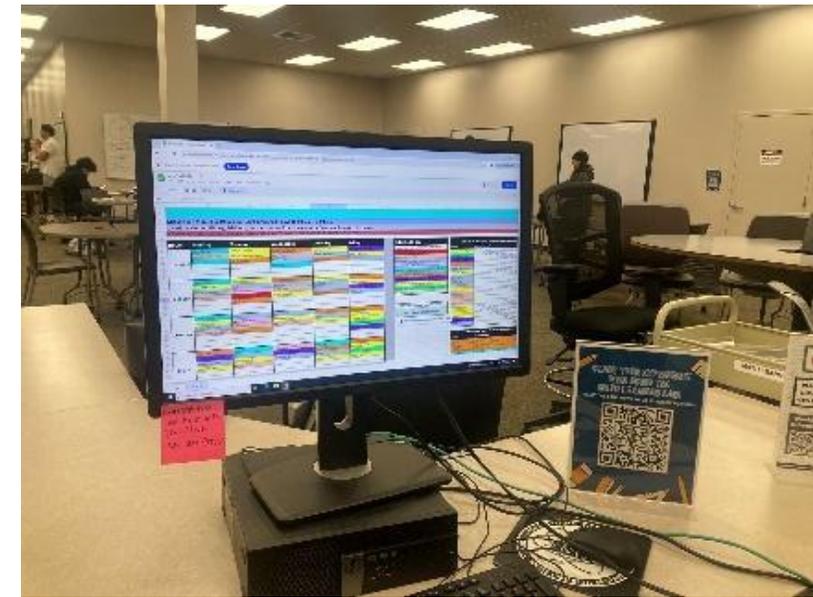
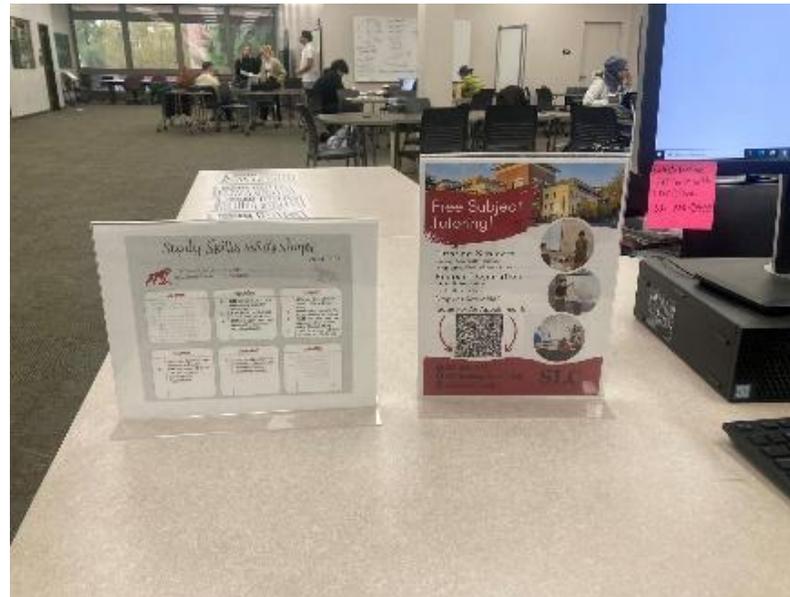
③Writing Center

- ・基本的には信大で実施されているものに近い. 図書館に専用スペースがある.
- ・「ヒントは出すが答えない」をモットーに, チューターが不要になることを理想としている.

①Subject Tutoringのようす(写真)



③Writing Centerのようす(写真)



Chico StateのSLCにおける運営

①採用

- ・Writing Centerのチューターは教員の推薦によって採用される。
- ・選考は, 出願書類, 成績証明書, 指導教員の推薦書, アカデミックライティングのサンプル4ページ以上, エッセイへのフィードバックのサンプルにもとづいて行われる。
- ・チューターとなるには少なくとも2.8のGPAが必要で, 低所得の学生や, 民族的多様性を担保するための採用が優先される。

②トレーニング

- ・セメスター開始前に3日間の集中トレーニングを受けている。
- ・SIリーダーにはループリックがあり, セッションに登録した学生の出席率や成績, 連携している授業への出席や教員のサポートなどによって定量的に評価される。

③アセスメント

- ・Subject Tutoringでは, 参加学生へのアンケートとチューターのセルフアセスメントをそれぞれ行われる。

Chico StateのSLCで重視されること

■“Comfortable Base”

◇コミュニティをどうつくるか

- ▶peer to peerが大切(彼ら・彼女らの言を借りれば, たとえばライティングの「技術」だけであれば, AIの支援だけでも成り立ってしまうため).
- ▶チュータリングに参加する学生の継続性を求めている. 場合によっては, 1年間同じメンバーが同じセッションに参加し続けることもある.

◇チューター側のモチベーション

- ▶参加した学生に感謝されたり, 彼ら・彼女らが成功したりする.
- ▶履歴書に書くときに評価される. など.
- ▶一方, 準備に時間がかかるために, タイムマネジメントが難しい, わからないことを聞かれたときにその場で困るなどといった難しさもある.

カルフォルニア州立大学サクラメント校(以下,「Sacramento State」)での実践

■The Peer and Academic Resource Center(以下,「PARC」)

◇インタビュー先

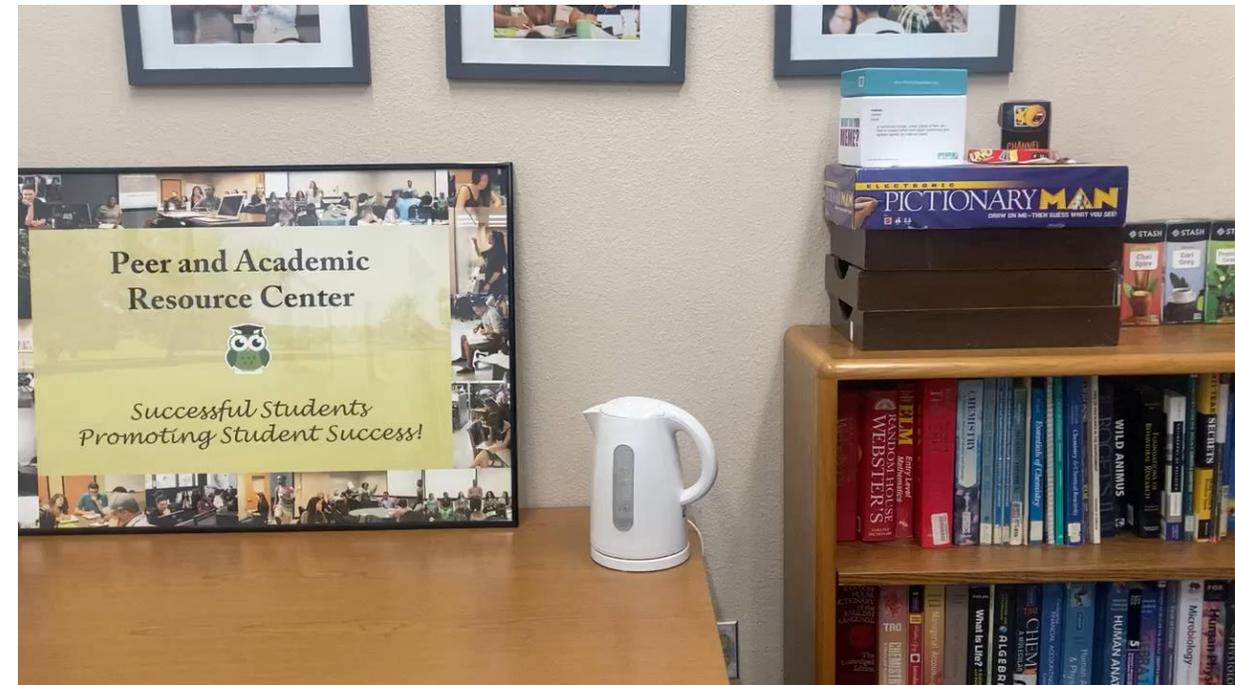
- ▶スーパーバイザー(学習支援担当の教職員), ピアチューター(学生).

◇制度設計

- ▶PARCのプログラムは, 以下の4つにわけられる.

- ①Supplemental Instruction
- ②Embedded Tutoring
- ③Workshops
- ④Sankofa

PARCのようす(写真・動画)



Sacramento StateのPARCによる3つのプログラム

①Supplemental Instruction

- ・Chico Stateと同じく, SIリーダーによってマネジメントされる.
- ・参加学生と教員のニーズを橋渡しすることが強調される.

②Embedded Tutoring

- ・「教室内のチューター」として教員と連携し, 学生が授業内容を理解する手助けをする.
- ・授業外に勉強会を開くことも許される.

③Workshops

- ・リクエストに応じて, 授業内ワークショップ(Academic Courses)と授業外ワークショップ(Campus Programs)を開く.

④Sankofa

- ・初年次に開催され, 参加学生は, それぞれの文化や歴史, 民俗的アイデンティティを互いに紹介しあうことで, 集団のメンバーシップについて学ぶワークショップ.



本日のメニュー

①アメリカでの調査報告

②日本での適用可能性

③ディスカッション

検討されるべき論点

■異なる文脈

①「ハイリスク」のちがい

- ▶日本における学習の「ハイリスク」は、授業というよりも、学生に焦点化されてきた。(e.g.,) 退学や留年など(立石・小方 2016).
- ➡授業に焦点化した場合、参加学生のモチベーションを見い出すのが難しい。
- ➡「よい成績をとること」に対するモチベーションは日米で異なる。

②①により、SI利用＝「ダメな学生」とみなされる可能性

- ▶日本では、「リメディアル教育」と「初年次教育」に、概念使用の混乱がみられる(谷川 2017).
- ➡SIは、実践的にはリメディアルに近いのだが、日本の「リメディアル教育」には「補習」のイメージが強い。

SIの利点とその前提となるインフラ(加藤鉷・加藤善 2017: 256)

■SIの利点

- ▶理想的な「主体的学修」である
- ▶担当教員の負担増なしに授業内容の補完ができる
- ▶SIリーダーは、SIリーダーを勤めたという経歴により、自分の市場価値を高めることができる
- ▶底上げを要する授業に対してピンポイントで学習支援を行うことができる
- ▶ピアによる指導であるため受講生が参加しやすい
- ▶個別授業を対象とする支援ではあるが、授業内容の重要ポイントを皆で探したり、分かっていることと分からないことを確認したりする等、「学ぶ力」を獲得する点に力点が置かれたセッションを展開している

■SI運営の前提となる専従員

- ▶スーパーバイザー:SIリーダーの選考、採用、研修プログラムの開発と実施、SIリーダーの評価、教員との連絡調整
- ▶コーディネーター:対象授業の抽出、学部の協力の取り付け、SIリーダー募集・配置、教室の確保、時間割の調整、IR的な意味での効果測定、予算運用を担当

(アメリカの2大学にはなかった)日本の大学の強み

■プログラムの評価

◇IR

- ▶2大学では, 効果の検証をあまり熱心に行っていないという印象を受けた.
(授業担当の教員がSIに学生を送り込むことはしていないし, 学習支援担当のスーパーバイザーも, 授業担当の教員から共有されたGPAなどの情報以外は知りえていなかったため)
- ▶「成績のよい学生は当然参加している」というイメージがステークホルダー間で共有されているからかもしれない.
- ➡日本の大学では, 効果検証を実施する土壌が(インフラもふくめて)整っていると考えられる.

本日のメニュー

①アメリカでの調査報告

②日本での適用可能性

③ディスカッション

文献

- 加藤鉦三・加藤善子, 2017, 「サプリメント・インストラクションの思想と設計——授業担当教員に負担を強くない学習支援プログラム」『信州大学総合人間科学研究』11: 251-7.
- Marra, Rose M. and Litzinger Thomas A., 1997, “A model for implementing “Supplemental Instruction” in engineering,” Proceedings Frontiers in Education 1997 27th Annual Conference. Teaching and Learning in an Era of Change, 1: 109-15.
- 立石慎治・小方直幸, 2016, 「大学生の退学と留年——その発生メカニズムと抑制可能性」『高等教育研究』19: 123-43.
- 谷川裕稔, 2017, 「ターム使用上の混乱——リメディアル教育と初年次教育の概念区分」谷川裕稔編『アメリカの大学に学ぶ学習支援の手引き——日本の大学にどう活かすか』ナカニシヤ出版, 126-35.